

考古学から見た播磨町の遺跡や出土品など、文化財のよもやま話をお届けします。

播磨町 むかし昔

その五 古代東播磨と住吉神社①

住吉神社が、播磨町本荘の周辺に数多く所在することの理由を船造りと関係づけ、前号で少し解説しました。本号では、その際に課題とした住吉神社との結びつき・時期を検討するため、古代播磨国の船造りについて紹介しましょう。

『播磨国風土記』『明石郡の逸文』（『新日本紀』）には、「難波高津宮（仁徳）天皇の御世、（中略）駒手の御井の楠を伐りて船を造る。その迅きこと飛ぶが如し。仍りて速鳥と号く」また、「（神功皇后が新羅へ進軍の時）爾保都比売命の教えの通り、赤土（丹）を天の逆棹に塗り、神の舟の艦と舳に建て、また御舟の裳と御軍の着衣とを染めて、海水を攪き濁らして、渡り賜ふ」との記載があります。そして、『続日本紀』天平宝字2（758）年三月条には、「船の名、播磨・速鳥を並びに従五

位下に叙す」とする記事も載せられています。

このように、明石郡内の津（湊）では、楠を使用した「造船（官船・軍船）」と赤土を利用した「艦装・出陣儀礼」が行われていたのです。そして、『日本書紀』神代上巻には、「杉と樟、この二つの木は浮宝（舟）をつくるのによい。」と記され、事実発掘された舟材には杉と楠が多いようです。古墳時代の船は、完全な形のもののは発見されていませんが、土器や板材に描かれた絵や埴輪の船から復元することが可能です。半分に割った大木をくり抜いた丸木舟を船底部にして、側面に板を付け足し、さらに船首・船尾には波よけの機能を持つ板を取り付けた、手で漕ぐ準構造船と呼ばれる過渡的な船です。奈良時代になると、遣唐使のため

に平底箱型の帆柱2本で、網代帆を用

【問合せ】 播磨町郷土資料館 学芸員 大平 茂
☎ 079 (435) 5000



復元された準構造船「ひぼこ」（兵庫県立考古博物館 提供）

いる構造船が造られました。また、こ
こ明石市魚住町にも住吉神社があり、
『住吉大社神代記』を見ると、住吉大
社の神領地（魚次浜）となっています。
賀古郡の阿閑津についても、坂江涉
は東播磨域における造船・艦装と関連
する可能性が高いと捉えています。そ
して、造船・艦装作業を補助・支援す
る湊の一つとして、住吉大社の支配下
に入ったと考えました。とすれば、阿
閑津付近が支配下に入った時期は何時
のことなのでしょう。

町の人口 7月1日現在

住民基本台帳人口（ ）は前月比
34,736人（±0人） 男…17,011人（-6人） 世帯数…14,351世帯（+11世帯）
女…17,725人（+6人）

